

優秀賞

同志社大学 アundas ANDAS (A)

『五味を満喫☆登別』

わたしたちが提案するのは、『登別＝北海道の縮図』、それを発見するプロジェクトです。登別の資源を最大限生かし、観光客が5つの魅力を体験できる、そんな観光政策を行いたいと思います。



登別に来る観光客の大多数は温泉が目的です。しかし温泉以外には魅力がないので、ホテル内では行動しない。そして日帰りや一泊の方が多という問題が分かりました。

つまり、今回のフォーラムのテーマ『登別発見の旅』にある登別温泉の一番の問題点は『登別らしさ』というところが温泉しかない、ほかにも登別の魅力があるにもかかわらず、温泉があまりにも素晴らしすぎるため、ほかの魅力が負けてしまっている。それを解決することを考えました。

この歴史ある温泉でなぜ温泉しかないのか、やはり危機感の欠如ではと考えました。ホテルの稼働率とい

うのが平成17年45%、平成18年43%と減っていますが、一部屋当たりの単価が増加していることからホテル経営自体がとてつもないわけではないと聞きました。そして一番の問題が観光客誘致の施策が中心ということです。登別が温泉にすべてを頼っていることが問題の本質であり、観光客が減っていることは結果でしかありません。根本にある登別には何が足りないのかを解決しなければ『登別らしさ』がないと考えました。温泉以外に何かがあるのか、登別の地域文化や固有の魅力は何かを再発見しなければならないと考えます。

わたしたちが発見した『登別らしさ』は、アイヌ文化、漁港、自然、温泉です。観光地登別の真の強みは、海産物や自然、アイヌ文化などがある、実はこれは北海道全体の魅力ではないか、登別にこそ北海道の魅力が凝縮されているのではないかと考えました。

わたしたちが考えた『五味を満喫』というプランですが、漁港や自然、文化、温泉、4つ考えました。そして五味の5つ目ですが、これは4つを受け身で体験するのではなく、観光客がどのような魅力を登別に見出すのか。例えばこんな登別の良さがあったということアンケート形式で市に投函し、それを今月の『第五味』として紹介する。これにより、市民やホテルの方もこういうことが良かったんだと再認識できると考えます。

岩手県立大学総合政策学部 田島ゼミ

『湯治場をメインにした観光政策』



『登別らしさ』ということで、初めに思い浮かぶことが温泉です。わたしたちは、団塊の世代などを登別に呼び込むことを念頭に、『温泉』を『湯治』と置き換えました。

そこで、カルルス温泉を視察し、現状と課題についてまとめました。

現状と課題として挙げられたのは、『湯治場以外のものがない』『整備が遅れている』『横の連携がない』『広報が不十分』『行政との連携ができていない』ということなどです。

そのため、行政と温泉旅館組合が協働すること、そして温泉だけではなく、ほかの要素を加えてプランニングを考える必要があります。温泉だけでなくそれをサポートする付加価値が必要です。

そして、カルルス温泉の宿泊施設の連携を強化し、共同でツアーなどを企画して集客に努めるべきです。

また、自然と温泉が放つ癒しの効果を登別カルルス温泉らしさとし、四季折々の自然の変化を生かすことで、新規顧客を呼び込めるのではないのでしょうか。



▲カルルス温泉でのインタビュー

登別市長賞

同志社大学政策学部 今川ゼミ

『登別オフィシャルドリンク制度』

～登別の資源から～



われわれが提案する『オフィシャルドリンク制度』では、まず市民委員会を創設します。構成メンバーは住民と生産者で、住民は各年齢層や地域からの代表、生産者は卵などを作っている生産者の代表です。委員会の位置付けは、住民とオフィシャルドリンク受け入れ企業との橋渡しです。そして立会人として市長や議会、登別市というものを置きます。これで住民、企業、市という三者協働という形が整います。

ドリンクは、登別産の物を使用し、パッケージは市民より募集した物を使用する。そしてこのオフィシャルドリンク制度で期待される効果は、登別らしさを発揮できる協働メカニズムが形成できること、地元への愛着、地元活性化、お土産、登別のPRです。課題は、いかにドリンクを定着させ、続けていくかです。続けていくからこそ、それが登別のものになるのではないのでしょうか。